

はじめに

一昨年をもって、本学体育共同研究室教官全員の海外研修は一周した。今後二週目に入るが、ともあれ歴史的な一段階を画したことになる。また、今年度から三年契約でドイツからハラルド・ポルスター助教授をお迎えしている。国際交流の更なる機会である。

こうした雰囲気の中で、最近の体育科ではドイツ語と英語の会話が飛び交っている。私も稚拙な英語ながらそれに参加している一人である。我々の誰もが、討論のできる水準の会話力を欲していることはもちろんである。またそれぞれに会話力の乏しさに悔しい思いをしたこともあるに違いない。私自身の留学経験から言えることだが、会話力を手段と割り切ったり、時には目的的に精進せねばならなかったりと、周期を繰り返した。ともあれ、内容の濃い交流をしようと思えば、その前提として交流手段のマスターは必須であるが、未だその手段で悩んでいるのが実情だ。

ところで、本研究年報1986年版に「外国研究とは何か」という小文を書いたことがある。先人たちの発言の中に学ぶべきことがたくさんあった。改めてそれを見ながら次のことを考えている。それは社会科学研究として、三つの基本的な領域を持つべきではないかということである。第一は、現状研究であり、社会科学の前提とも言うべき事項である。現在を生きる研究者として現在に責任を持つべきだからである。現状のそれから外れれば、それはやはり「逃避的な」ものになってしまうであろう。そして第二、三には、歴史研究と外国研究である。どちらが先にくると言うべき問題ではないが、ともあれこうした二つの視点での接近が必須である。まず歴史研究から言えば、第一の現状の諸問題の歴史的な位置付け、解釈が必要である。逆に、現状認識を欠いた歴史研究は、単なる回顧趣味となるからである。歴史的かつ構造的な思考はいかなる場面においても貫徹すべき思考方法であろう。そして外国研究は、自国の相対的な理解にとってやはり不可避な方法である。外国から自国を見ることによって、自国のより深い理解が可能となるからである。もっともこの場合も、自国の現状認識が機軸とならなければ、外国研究自体が観照的研究に墮する。

この三者の均衡の取れた研究スタイルが、自らの研究活動をいつまでも若々しく保つ源泉であろう。言うは易いが行うは難しである。よく、「進んだ領域、遅れた領域」というが、内容的には上記の思考による蓄積の差異をもってそう表現するのではないかと思う。我々の学問分野は未だ若い科学であり、それらの蓄積は少ないが、しかし徐々に歩み始めていることも事実である。本学の体育共同研究室は規模としては大きくはないが、こうした社会科学の基本に沿った蓄積に貢献し得る条件を持っているのだと思う。学内外の人々との共同を支えとしてその課題に挑戦したいと思う。

1993・6

一橋大学体育共同研究室長
内海和雄